シールラベルコンテスト 受賞企業に聞く

第1回 丸信

“快挙”支える「現場力」と「理解」

初参加から連続入賞、3回目でついに最高位

昨年実施した全日シール連主催の「第26回シールラベルコンテスト」で、九州協組所属の㈱丸信（福岡県久留米市山川市ノ上町、平木洋二社長）が最高位「経済産業大臣賞」を獲得した。前々回初めてコンテストに参加した同社は、いきなり「日本印刷産業連合会会長賞」を獲得。そして前回は「経済産業省商務情報政策局局長賞」受賞と初参加から3、2、1位に輝く快挙で大きなインパクトを与えている。本紙は作品に携わったシール印刷課の江崎英治主任と中野裕一主任、製版課（当時）の米倉春美課長代理に話を聞き、丸信の〝凄さ〟に迫った。（上田）

――オペレーターお二方の担当をうかがいます

江崎　私は入社13年目で、入社時から平圧機を担当しています。現在は箔押しとエンボスといった特殊加工がメーンで、今回の受賞作品でも箔押しとエンボスを担当しました。

中野　私も入社13年で、現在は岩崎鉄工のオフセット間欠機のオペレーターを担当しています。箔押し前のベースとなる印刷を担当しました。

――今回の作品選定はどのように

米倉　当社でのラベルコンテスト担当を初回参加から務めさせていただき、今回もその役を担っていました。その関係でコンテストの候補作品を探すために仕上がり品をチェックしていたところ、今回の焼酎ラベル「闇魔」（老松酒造㈱）を見かけました。一目見て「これはすごい」と思わず笑みがこみ上げる豪華さ。このほかに候補はないかと見てはいましたが闇魔を超えるインパクトのラベルは見当たらず、面白い結果になるのではと感じてこれで勝負しようと選びました。

――金地に力強いエンボスと、派手さと存在感は絶大ですね。出品用に再度印刷加工を行った際、新たに挑んだことはありますか

江崎　デザインや印刷加工はまったく一緒ですが、コンテスト作品では特にエンボスに力を注ぎました。製品としてお納めする場合は、ラベラーでぴんに貼付する工程を考慮して、破れを防いだり剥離しやすくしたりするためエンボスを若干ゆるく施す必要があります。一方、コンテストは台紙に貼り平面で掲示するので、そうした心配もなく思いきり盛り上げられます。

加工した後に光に透かしてみて、破れそうな部分を見つけては銅版を少し削る。これを繰り返しながら、破れる直前のギリギリまで追い込みました。

中野　これに対して印刷ですが、箔が乗る前はスミと刻印の赤と、ごくシンプル。それでも文字を濃く出すためにシアン、イエロー、マゼンタを印刷して、その上にスミが乗っています。通常よりインキを多めに出しながら、見当精度に神経を集中して挑みました。

米倉　金ピカは基材表面に凹凸がある紙なのでスミ1色だけでは光の乱反射で薄く見えてしまい、印刷が光沢に負けてしまいます。可読性が下がり、めりはりもつかないので、光を遮る目的で色を重ねました。

――普段からも講じるテクニックなのですか

米倉　いえ、普段の仕事で明朝体のような細いスミ文字の下に3色引くような処理をしたら確実に現場から怒られます。「これ製版ミスではありませんから」と予め告げました。

中野　特別仕様ですが、仕上がりは狙い通りピカイチでした。

――苦労した点について

江崎　やはり箔とエンボスです。ゴールドを静止画像カメラがまったく拾わない中で、小さな文字や図柄を合わせる作業にものすごく神経を使いました。

中野　見当をより安定させるため、特別にブランケットを版のサイズに切って極力印刷ズレをなくすよう試みました。とは言え、このラベルの主役はやはり箔押しとエンボス。本当に大変そうだなと後工程を見て感じていました。

江崎　金にスミのみでは極端に色が薄い。あそこまでスミがスミらしく再現でき、あの輝きに負けず文字がちゃんと読めるのは、印刷のおかげです。私も中野さんが見当合わせに腐心している姿を見ていますから「もう一回刷って」とはとても言えない、失敗できないと集中しましたね。

（左から）印刷担当の中野裕一主任、製版を担当した米倉春美課長代理、箔押しとエンボスを担った江崎英治主任

――受賞を聞いたときは

江崎　正直、自分の中では何かしらの賞は獲れるだろうという漠然とした自信はありました。ですから驚きではなく「ほらやっぱり」という笑みが込み上げました。受賞を報告した朝礼の時の皆もやはり同様で、えっ、といったリアクションではなく「やっぱりあのラベルが！」という歓喜の笑いが起きていました。

米倉　私は喜びを感じた後、ホッとしました。コンテスト以外にも担当が割り振られており、掛け持ちNGと聞いていたため今回はコンテスト担当を辞退したいなという気持ちがちょっとあり「担当掛け持ちになってました」と報告メールを平木社長へ送信。すると返信が届いて、一言「経済産業大臣賞よろしく」と。ああっ、やらなきゃいけない！と何とも言えぬプレッシャーを感じていました。

平木社長が目標を立て、社員の私達がそれを達成する。こうして得られる喜びは格別なものがあります。昨年の沖縄年次大会で執り行われた表彰式では、前の方の席に座って壇上で江崎さんが表彰を受ける動画を撮り、式典終了後すぐに社長へ送り報告しました。社名が読み上げられた時は感極まって泣きそうでした。

――なぜ輝かしい成績を収められるのか、自社には何があると分析できますか

江崎　前工程と後工程の連携があり、問題が生じたら即座に前工程の米倉さんを中心に対応してくれます。また、QC活動を通じて新人でもベテランと変わらない知識を取得し、最短距離で成長を促進する環境も整っています。こうした情報の共有、技術の水平展開を図る体制が整備されている点が当社の現場力を生んでいると感じます。

中野　加えて協力体制がある点。たとえ繁忙期でも、全員で協力して時間を作ります。個人の優れたスキルが作品を生む訳ではなく、周りの理解やサポートなしには決して完成しません。

江崎　担当者が心置きなくコンテストに時間を注げるような周囲のフォローがある。皆が同じ方向を向いていることが、良好な結果を生み出していると言えるのではないでしょうか。

――最後に、これからの決意や展望をお伺いします

中野　仕事は楽しいものであれ、という信条を持っています。今後も常に前向きに臨み、楽しく仕事に従事していけるよう努めていきます。後は、今回の受賞は箔とエンボス中心でしたので、次は印刷メーンでぜひ入賞したいです。

江崎　私は常に「ミックスアップ」を心がけています。ベテランと若手など、人と人とをぶつけて常に高め合い互いに進歩できるような環境を整えていきたいと考えます。

コンテストは、やはり「連覇」でしょうか。自由課題以外に規定課題も獲りたいですね。平圧部門で私も挑んでみようかと思います。

米倉　大切なのは「イメージすること」。私たちが日々作るのはお客さまの商品の一部であり、売上を左右するものを担っています。お客さまと、その先の消費者としての視点を忘れてはいけない。大事な仕事を任されているのだなと日々感じています。

応募作品に対して採点表がもらえるのですが、実は過去の点数を参考に自社の弱い部分をつぶしていくことを狙って毎回デザインを選定してきました。こうして蓄積した知識や技術、経験を、次の世代へ継承して行く事が今の私の役目だと考えています。